

## セム著『シックの本物と偽物』

助教授（西洋服装史担当）辻 ますみ

セム(SEM)、本名ジョルジュ・グルサ(Georges Goursat 1863-1934)は、1900年、38歳でパリにやってきた。そしてその年の6月に『セムの競馬場』と題する、28枚のリトグラフによる人物風刺アルバムを出版する。時まさにベル・エポック、社会階級とスタイルがまだ重要な意味を持ったスノブの時代であり、人に見せ人に見られることにうつつを抜かす上流社会があった。セムは、競馬場に集まる著名人の姿態を、柔らかい線と優しい色彩で描き出した。その筆は人物の性格をしかととらえ、時に虚栄の醜さをあばく辛辣さを見せたが、面白いことにそうした彼の作品をこぞって買ったのは、モデルに取り上げられた人々だった。描く対象が顧客になるという巡り合わせで、セムの仕事は最初から順調にすべり出した。その後はマキシムを舞台に、あるいは有名な避暑地の海岸などを背景に、パリの名士を次々に筆で料理していき、1904年には早くもレジオン・ド・ヌールを授受している。セムの風刺画は、表情はもちろんだが、むしろ体の動きや仕種で人物を解説してくれる点がユニークであり、魅力でもある。単なる人物スケッチで終わらず、どんな人物にも、そこはかたない可笑しさが加味されていて、愉しませてくれる。

1914年6月に出版した『シックの本物と偽物』(SEM, Le vrai et le faux chic, 1914, Paris) (K726.1-S) は、風刺人物画の類ではなく、当時の女性のモードを批判した、セムにしては新しい試みのアルバムである。無名の女性たちの大小のデッサンの他に、面白くかつ痛烈な彼自身の解説が付いている。

セムを駆り立てたのは当時のモードの混乱だっ

た。「自分のセンスを他人に強要するのは、まことにセンスに欠けるやり方だ。したがってこのタイトルがいささか押し付けがましい表現になってしまった事をまず謝っておこう。私は審判官になるつもりはない。だが現在モード界や産業美術界における無秩序は誰の目にも明らかであり、何らかの制御が必要だ。デッサンとコメントからなる真面目な本書において、混乱の中でまともな感覚を持つ、良識ある人々の意見を披露しようと思う。風刺作家として私は、物事や人物の特徴を探しだし、滑稽な側面を見付け出す訓練をなが年続けてきた。空想的な箇所もあるが、正常な道理と分別が戻ることを狙ったこのエッセーに、あえてこのタイトルをつけた次第である。」セムの冒頭の言葉である。

女性の体からコルセットを外し、ストレートなシルエットを創案したポール・ポフレが、クチュールを開店したのが1906年だった。まさに20世紀のモードの幕開けであったが、しかしそれが一方で大変な混乱をもたらしていたことが、セムの大胆なデッサンと辛口のコメントから伝わってくる。流行衣装を着た女性を、触角を振りかざす昆虫や、気味悪い毛虫や、男を貪り食わんばかりの毒虫に、果てはアフリカの未開人や宇宙の異星人にたとえ、その様を描く。

「形の定まらない布、意味のないひだの洪水、何段にも重ねたフレアー、理屈に合わないくびれと膨らみ、鋭角のへこみと意外な出っ張り、ボタンにならないボタン、すべてがロジックへの挑戦である。」と女性の衣装を分析して、『間違いだらけの博物館』(Musée Ereure)と題するデッサンを16ページに渡って繰り広げる(図1、2)。確

かにセムが指摘するように、フープやフレアなどの意外な付属物や、部分的な誇張が目につく。流行の要素を精一杯取り入れて、いかにも得意気に街を行く熟年女性たちを、皮肉とユーモアを利かせた筆でとらえている。

セムはさらに頭とかぶりものに筆を向ける。台形・円錐・多面体、さらには司教のミトラからターバンにいたるまで、「過去のあらゆる時代あらゆる国のかぶりもの」を、平然と身構え勝ち誇ったような笑みをうかべた女性の頭にのせる。

「技術を駆使してフォルムをシンプルに変えた自動車ルノーと、すっきりしたシルエットを持つ趣味良い男性、これに対して鶏冠<sup>とさか</sup>を逆立てた発疹まみれの雌鶏とでは、まことに大きな違いが間にあって、これら一団が同じ時代を生きているとは思じがたい事である。」と、女性の衣装の異様さに嘆息する。

そして最後に、パキヤン、シュリユイ、ドウイ工、ウォルトら、当時のオート・クチュールの老舗の作品を取りあげ、ファッション・イラストレーターばりの洒落たタッチで、パリジャンの正統なシックを提示してみせる。いずれも誇張した部分のない、すっきりしたシルエットの衣装が選ばれており、セムが言わんとしたことが、ここにき



図1

て明らかになる。

19世紀末期から1900年代の、しなやかな曲線をもつ衣装を描き続けてきた風刺作家には、10年代のモードは単なる自由奔放と混乱だけに見えたであろう。セムが指摘したグロテスクな要素はどれも、ポワレの斬新なアイデアに発している。

こうした混乱を押さえ、女性の衣装から余分な装飾を取り除き、パリジェンヌに本来の魅力を取り戻したのが、セムが常に支援した女友達、ココ・シャネルだった。女性の衣装も思いつきのアートでは済まぬ時代が、すでにやって来ていたのである。ポワレの急速な失墜の原因の一端が、セムのデッサンとコメントからはからずも見えてきたように思う。

第一次大戦中、セムは前線の兵士らを描いた報道デッサンとコメントを雑誌などに発表している。戦後は、新しく生まれ変わった社交界の面々や話題の人物をモデルに、再び人物風刺に筆をふるった。ベルエポックの世相と社交界の著名人、そしてアメリカのジャズとダンスに溢れ狂った、第一次大戦直後のパリの風俗を視覚的に知るうえで、セムの諸作品は欠かせないものの一つだろう。

※『続西洋服飾関係欧文文献解題・目録』(p. 38~39)の作者の一人、セムとは別人である。



図2